

梅の花 夢に語るかたらく

みやびたる 花と我あれ思もふ 酒に浮かべこそ

おおもものたびと
大伴旅人



Blossoms of the plum
Spoke to me within a dream:
“Elegant flowers
Do we think ourselves to be —
You should float us in the wine!”

梅香る季節となりました。

「初春令月 氣淑風和」

元号である『令和』の元になったのは、万葉集にあるこの一節です。

初春の佳き月、空気は清く澄みわたり、風はやわらかにそよいでいる。

こんな書き出しの序文で始まる『梅花の宴』には三十二首の歌があります。

太宰府へ赴任した大伴旅人が、梅の花咲く庭に客人を呼んで催した歌会でした。

この時、旅人は長年連れ添った妻を亡くしたばかりでした。

集まった客人は、気心の知れた友人や役人たち。三十二首の歌の流れが

その様子を生々と伝えてくれます。時にしんみりしたり、茶化して笑い合ったり。

旅人もとても楽しかったようで、この宴の後にもいくつか歌を足しています。

表題の歌は、その一番最後の歌になります。

「梅の花が夢の中でこう語った。

『自分のことを風雅な花、と私は思っています。

どうか無駄に散らさずに、酒の上に浮かべて下さい』と。」

酒が大好きだった旅人。

妻への想いも梅の花に託しながら、この梅花の宴は幕を閉じました。

万葉集の梅は、全て白梅と言われています。紅梅が伝来したのは平安時代。

この宴で皆が眺めていたのは、雪のように白い梅の花でした。

(万葉集 巻五 八五二 英語訳 『A Waka Anthology vol.1』 Edwin A. Cranston Stanford University Press)

花物語

